

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12430

研究課題名(和文)「日本語学習者のための漢字学習方法・意識の調査票」の開発と多言語化

研究課題名(英文) Development and multilingualization of the "Questionnaire on Kanji Learning Methods and Attitudes for Japanese Language Learners"

研究代表者

濱川 祐紀代 (HAMAKAWA, Yukiyo)

早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授(任期付)

研究者番号：40725446

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：漢字学習研究の共通ツールとなる「漢字学習の方法やそこに付随する意識を概観できるような質問紙調査票」を開発し、日本語学習者や日本語非母語話者教師の漢字学習に関する実態調査と合わせて今後の漢字指導の方向性を探ることを目的とした。調査の結果、漢字指導方法も漢字学習方法も読み書き中心で、漢字指導・漢字学習に対する不満はあるが、いろいろな指導方法・学習方法があるということに気づいていないことが観察された。教師側への情報が不足していることから、今後は教師を対象にした指導方法のセミナーを実施し、教師の指導方法に変化が生じることで学習者の学習方法の充実が図れればと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教師は自身の経験から、漢字を書いて覚えさせたり、何度も反復練習をさせるといった指導方法をとることが多い。そのため、学習者はそのような学習方法しか知らず、長い道のりである漢字学習を途中であきらめてしまうこともある。そこで、漢字指導にはさまざまな方法があることを知り、それを指導に活かすことは非常に重要である。また、漢字研究者も、自身の経験から調査票を作成し、自身の担当クラスだけで研究を進めることがある。漢字学習研究全体を俯瞰して見ていくためには、新たな調査票の作成が必要であった。本研究では、その調査票の作成・修正を行い、公表してきており、学術的な意義があるものとする。

研究成果の概要(英文)：The objectives of the survey were 1) to develop a questionnaire survey form that would serve as a common tool for Kanji learning research and provide an overview of Kanji learning methods and the attitudes associated with them, and 2) to explore the direction of Kanji teaching in the future in conjunction with an actual survey on Kanji learning by Japanese language learners and non-native Japanese speaker teachers. As a result of the survey, it was observed that both kanji teaching and kanji learning methods are centered on reading and writing, and that although there is dissatisfaction with kanji teaching and kanji learning, they are unaware that there are various teaching and learning methods. Given the lack of information on the teachers' side, we hope to conduct seminars on teaching methods for teachers in the future, and hope that changes in teachers' teaching methods will lead to enhanced learning methods for learners.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 日本語学習者 漢字学習 学習方法 ストラテジー 学習意識

1. 研究開始当初の背景

日本語学習者にとって漢字は難しいものだという定説がある。報告者自身も、日本語教育の現場に立ち、目の前の学習者の声に耳を傾けてみたとき、「漢字がたくさんあるから好きではない、1つの漢字に複数の読み方があるから嫌だ、覚えても忘れてしまうから嫌だ、学習方法が分からないから困る」といった訴えを受けることが多かった(濱川 2015 など)。先行研究においても、それぞれの教育現場において、どのように漢字が学習されているか、どのような意識がもたれているかという点について論述されてきている。しかし、各調査は小規模であり、調査対象者に偏りがあること、現場に合わせた調査票であることから、調査票の信頼性・妥当性が担保できていないなど、研究としての不備を認めざるをえない。つまり、研究成果を一般化しづらい状況が続いてきたとも言える。そこで、漢字学習研究の共通ツールとなる調査票「漢字学習の方法やそこに付随する意識を概観できるような質問紙調査票(以下、「調査票」)」の必要性を感じ、その開発を行うこととした。さらに、開発できた際には、(日本語教育分野における)漢字学習に携わる実践者・研究者に、その調査票を広く提供していくこととする。

2. 研究の目的

研究開始当初、上述の背景を改善するため、漢字学習研究の共通ツールとなる「調査票」(漢字学習の方法やそこに付随する意識を概観できるような質問紙調査票)を開発することを目的とした。さらに、(日本語教育分野における)漢字学習に携わる実践者・研究者に、その「調査票」を広く提供していくことも目指した。しかしながら、新型コロナウイルスの感染症拡大の状況から、「調査票」を用いた調査ができなくなるなどし、研究計画を変更せざるをえなかった。そこで、本研究は、過去に報告者が作成した「調査票」を修正していくこととした。さらに、学習者や非母語話者教師の漢字学習に関する実態調査と合わせて、今後の漢字指導の方向性を探ることを目的とすることにした。

3. 研究の方法

本研究は次のような流れで進めてきた。

- 1) 漢字学習方法や漢字学習意識に関する先行研究レビューをし、漢字学習方法及び漢字学習意識に関する調査票の存在と活用方法を確認した。
- 2) 過去に報告者が作成した調査票を修正し、タイ・バンコクにある2つの大学で調査を行った。その結果をタイ国日本語教育研究会年次セミナーで発表し、協力校の募集や試行の可能性について伺った。
- 3) 先行研究レビューをする中で、これまでの漢字学習意識の調査のやり方に疑問をもち、漢字学習意識全般をはかる調査票の必要性を感じた。そのため、過去に報告者が作成した「調査票」が機能するのかを確認する必要があると感じ、フィリピン人への調査を行った。調査はインタビュー調査と質問紙調査の2種類であった。結果はカナダ日本語教育振興会(CAJLE) 2018年次大会でポスター形式で発表した。
- 4) さらに、先行研究レビューをする中で、「近年の特徴」「スマホネイティブ世代の学習の特徴」が含まれていないことが懸念された。そこで、SNSを使用して外国人日本語学習者に広く調査を行い、どのようなデジタルツールを利用しているかを確認した。
- 5) 漢字学習研究の共通ツールとなる「調査票」を開発するにあたって、2020年度以降は開発した「調査票」を使用しての大規模調査を予定していた。また、専門家(日本語教育関係者)との意見交換も予定していた。しかしながら、コロナ感染症拡大の影響で調査実施が難しくなり、そのほとんどを見送り、研究計画そのものを見直すこととした。その一方で、2020-22年度は調査票の見直しと修正を続け、オンライン(Google Forms)で実施できるようにした。
- 6) 調査票にはさまざまな漢字学習方法が含まれているが、実際の教育現場での漢字指導方法・漢字学習方法を知る必要があると考え、日本語非母語話者教師(以下、非母語話者教師)の漢字指導方法・漢字学習方法を確認した。
- 7) 最後に、漢字学習方法を学んだ学生を対象に調査を行い、漢字学習方法を知ることが漢字学習の役に立つのかを確認した。

4. 研究成果

本研究の成果概要を順を追って記述する。

まず、タイ・バンコクにある2つの大学で、漢字学習方法の調査を行った。「調査票」は濱川(2017)で公表したもののうち、タイ語版を修正し使用した。よく使う方法は、1位「何度も見て漢字を覚える(62%)」、2位「漢字がわからないとき辞書で調べる(56%)」、3位「漢字の読み方を書く(52%)」、4位「何度も書いて漢字を覚える(48%)」、5位「漢字がわからないとき教師や友達に聞く(40%)」「日本語の文章を声を出しながら読んで練習する(40%)」であった(濱川 2019a)。割合からして、いずれも「みんなが使う方法」とは言えないが、オーソドックスな方法で目新しさや工夫はあまり感じられなかった。また、使用場面への着目はないうえ、ウェ

ブ・アプリの使用もそれほど見られなかった。

次に、漢字学習意識の調査票についても確認をするため、非母語話者教師へのインタビュー調査と質問紙調査を行った(濱川 2018)。質問紙調査には濱川(2017)の調査票を使用した。インタビュー調査で明らかにされる要因が「調査票」の項目に含まれているのかも確認した。教師のビリーフは指導時に学習者に影響する(Shimizu&Green2002)とされているうえ、非母語話者教師は現役の日本語学習者でもある。学習者を対象とした研究は多いが教師対象の研究は少ないため、今回は日本語学習者への影響も大きい非母語話者教師を対象に調査を行うこととした。本研究ではフィリピン人日本語教師を対象とした。結果は次のとおりであった。①学習者として：漢字は自国で必要がないうえ、覚えてもすぐ忘れてしまうことから、あまり得意とは言えない。漢字には読み方が多いため難しい。しかし、学生時代の教師がストーリーを教えてくれたことで漢字が大好きになった。②教師として：好き・得意というポジティブな意識よりも不安・不満といったネガティブな意識のほうが強い。漢字は他の分野(読解・会話など)に比べて教師の役割は大きい。理想とする指導方法もあるが、決められたシラバスがあるため、それが叶わず不満で、困っている。次に、質問紙調査をフィリピンの非母語話者教師 10 名を対象に行った。①漢字学習と漢字指導を比べると、漢字学習より漢字指導のほうにネガティブな傾向がみられる。②多くが漢字学習も指導も得意ではないとしており、漢字指導について不安や不満を抱えている先生が多いことがわかった。そして、インタビュー調査と質問紙調査の結果を比べてみると、類似傾向が認められた。またインタビュー調査で出された項目は「調査票」にも含まれており、妥当性が認められた。

上述したように、濱川(2019a)はタイ人日本語学習者の調査の結果、ウェブ・アプリの使用が見られなかったが、先行研究レビューをする中で「近年の特徴」「スマホネイティブ世代の学習の特徴」が含まれていないことに気づいた。そこで、改めて SNS 上でウェブ・アプリの使用に関して調査を行った(濱川 2019b・2021)。その結果、辞書機能や暗記カード(フラッシュカード機能)、読み書き練習(空欄補充)の機能などが使われていることがわかった。これは、神崎(2018)や矢吹ソウほか(2018)でも同様のことが言われており、世界的に同じ傾向があるのではないかと推測される。

では、さまざまな漢字学習方法がある中で、それを体験的に学んだ学習者は、それらの方法を使い続けるのだろうか。この疑問点を解決するために、漢字学習方法を増やすための授業をオンラインで行った(濱川 2024a, 2024b)。学習者(15名・多国籍)は初め、漢字を書いたり、単語カードで見たりに学んでいた。履修後のインタビューでは、①書く回数やアプリ使用が減った、②読み物から漢字を学ぶようになった、③音符リストの作成を始めた、④気分や目的で学習方法が選択できるようになった等の変化が見られた。さらに、学んだ漢字学習方法が1年後も(レベルが変わっても)使える復習方法になったこともわかった。

ここまでの調査等をふり返ってみると、教師も学習者もオーソドックスな方法で指導・学習をしており、不満はあるが、そのほかの方法があるということに気づいていないことが観察された。そこで、本研究は、最終年度に「調査票」の見直しと修正を続け、オンライン(Google Forms)で実施できるようにした(2024年6月現在は移設予定のため非公開)が、今後は「調査票」を用いながらも教師を対象にした指導方法のセミナーを実施していきたい。そうすることで、学習者の学び方を充実させ、漢字学習への意識もポジティブなものへと変化していくことが期待される。

<参考文献>

1. 神崎佐智代(2018)「日本語学習におけるモバイルアプリの利用と対戦型オンラインゲームの活用」カナダ日本語教育振興会 2018 年度年次大会・発表資料
2. 濱川祐紀代(2015)「日本語非母語話者教師を対象にした漢字学習ストラテジー指導の試み」『日本語学 2015 年 4 月臨時増刊号』34(5), 明治書院, pp.116-125
3. 濱川祐紀代(2017)「非漢字系日本語学習者を対象にした漢字学習の方法と意識に関する質問紙調査－調査の手順と調査票の共有－」『JSL 漢字学習研究会誌』9, pp.28-61
4. 濱川祐紀代(2018)「あるフィリピン人日本語教師の漢字指導に関する意識－理想と現実－」CAJLE2018 年次大会(ポスター発表)
5. 濱川祐紀代(2019a)「タイ人日本語学習者(学部生)の使用する漢字学習方法」タイ国日本語教育研究会第 31 回年次セミナー(口頭発表)
6. 濱川祐紀代(2019b)「パソコンやスマホを使った漢字学習」の方法を探る」『JSL 漢字学習研究会誌』11, pp.107-113
7. 濱川祐紀代(2021)「第 12 章 漢字学習におけるデジタルツールの利用傾向」青木直子・バーデルスキー・マシュー(編集)『日本語教育の新しい地図－専門知識を書き換える－』ひつじ書房 pp.233-249
8. 濱川祐紀代(2024a)「授業で学んだ漢字学習方法は使われるのか」タイ国日本語教育研究会年次セミナー(口頭発表)

9. 濱川祐紀代 (2024b) 「授業で学んだ漢字学習方法は使われるのかー1年後のフィードバックからー」 第98回 JSL 漢字学習研究会 (口頭発表)
10. 矢吹ソウ典子・犬塚久美子 (2018) 「オンライン教材と大学日本語コース用漢字教材：より効果的な自立学習の促進のために」 カナダ日本語教育振興会 2018 年度年次大会・発表資料
11. Shimizu, H. and Green, K. (2002) Japanese Language Educators' Strategies for and Attitudes Toward Teaching kanji. 'Modern Language Journal. Vol. 86 summer'.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 濱川祐紀代	4. 巻 12
2. 論文標題 漢字指導・漢字学習の方法と意識 - カナダでの調査結果概要 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JSL漢字学習研究会誌	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱川祐紀代	4. 巻 12
2. 論文標題 学習方法に焦点をあてた漢字科目の提案	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JSL漢字学習研究会誌	6. 最初と最後の頁 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱川祐紀代	4. 巻 12
2. 論文標題 漢字教材を分析する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JSL漢字学習研究会誌	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱川祐紀代	4. 巻 12
2. 論文標題 教室活動を考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JSL漢字学習研究会誌	6. 最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱川祐紀代	4. 巻 12
2. 論文標題 共有の場ワークショップ第1弾「あるフィリピン人日本語教師の漢字指導に関する葛藤を聴いて」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JSL漢字学習研究会誌	6. 最初と最後の頁 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱川祐紀代	4. 巻 11
2. 論文標題 パソコンやスマホを使った漢字学習の方法を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JSL漢字学習研究会誌	6. 最初と最後の頁 107-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 JFT Online Teachers' Workshop: Kanji Teaching Consultation (漢字指導お悩み相談会)
3. 学会等名 The Japan Foundation, Toronto (カナダ) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 漢字指導方法はいくつある？ー共有から始めて選択肢を増やそうー
3. 学会等名 JALTA日本語教育振興会主催日本語教師オンライン研修会 (カナダ) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 「漢字学習方法の選択肢を広げる授業」『「漢字を活用する力」とは?』
3. 学会等名 第32回第二言語習得研究会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 漢字指導・学習の方法 パリエーションはどのくらい?
3. 学会等名 キルギス日本語教育セミナー2021（キルギス日本語教師会）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 漢字指導にパリエーションを 漢字学習方法の選択肢を増やすために
3. 学会等名 JFTオンライン日本語教師研修（国際交流基金トロント日本文化センター）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 漢字学習方法にパリエーションを 明日から始められる教室活動
3. 学会等名 英国日本語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 漢字指導方法にも選択肢を 明日から始められる活動例
3. 学会等名 JF日本語ネットワーク特別プログラム 日本語教育セミナー（バルセロナ自治大学・翻訳通訳学部）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 漢字学習方法にバリエーションはありますか？ 明日から始められる活動例
3. 学会等名 2021年度マレーシア日本語教育セミナー（国際交流基金クアラルンプール日本文化センター）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 使用場面を意識した漢字の教室活動
3. 学会等名 オンライン中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム（国際交流基金カイロ日本文化センター）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱川祐紀代・小室リー郁子
2. 発表標題 漢字指導・漢字学習の方法と意識 - カナダでの調査結果概要 - （講演）
3. 学会等名 振り返ろう！漢字教育 - 教室でこそできる漢字学習に向けて - （JSL漢字学習研究会 in TORONTO）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 学習方法に焦点をあてた漢字科目の提案（講演）
3. 学会等名 振り返ろう！漢字教育 - 教室でこそできる漢字学習に向けて - （JSL漢字学習研究会 in TORONTO）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 漢字教材を分析する（ワークショップ）
3. 学会等名 振り返ろう！漢字教育 - 教室でこそできる漢字学習に向けて - （JSL漢字学習研究会 in TORONTO）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 教室活動を考える（ワークショップ）
3. 学会等名 振り返ろう！漢字教育 - 教室でこそできる漢字学習に向けて - （JSL漢字学習研究会 in TORONTO）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 あるフィリピン人日本語教師の漢字指導に関する意識 - 理想と現実 -
3. 学会等名 CAJLE（カナダ日本語教育振興会）2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 濱川祐紀代
2. 発表標題 タイ人日本語学習者（学部生）の使用する漢字学習方法
3. 学会等名 2018年度タイ国日本語教育研究会年次セミナー
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------